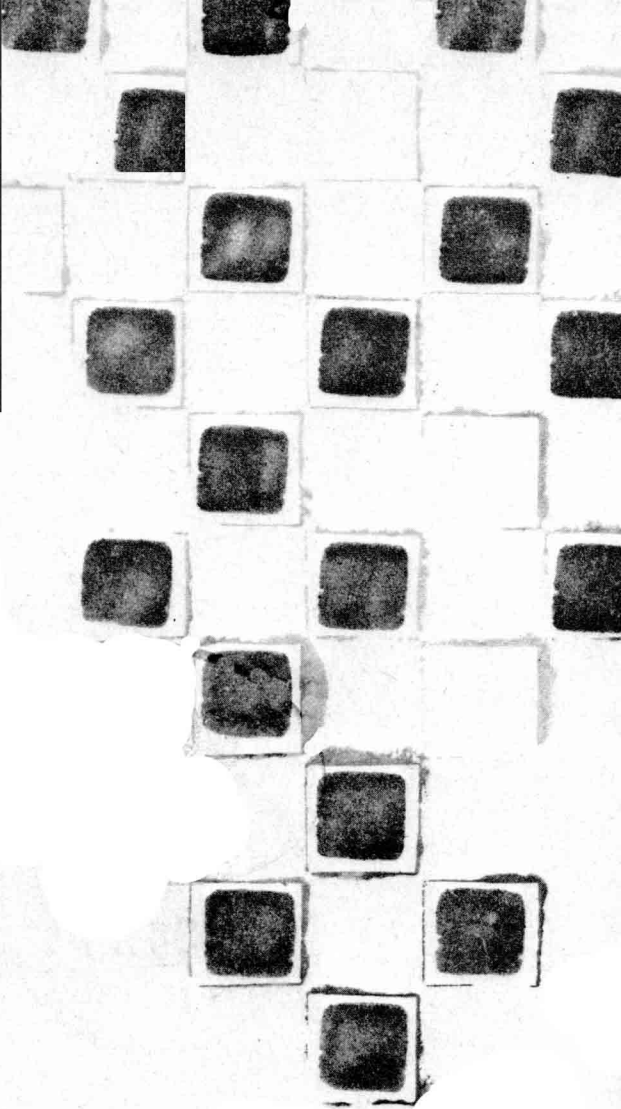


駒田信二

私の小説教室

駒田信二

私の小説教室



駒田 信二(にまだ しんじ)

1914年、三重県生まれ。東大文学部中国文学科卒。現在、早稲田大学客員教授。中国文学の第一人者として作家、翻訳活動などで幅広く活躍中。

主な編著訳書に「新十八史略・全6巻」「対の思想」「谿の思想」「壺中の天」「魯迅作品集」「水滸伝」などがある。

私の小説教室		定価 九八〇円	昭和五十六年八月二十五日 第一刷 昭和五十六年九月二十五日 第二刷	著者 駒田 信二	編集人 菊地 敬夫	発行人 関根 望	発行所 毎日新聞社	東京都千代田区一ツ橋 大阪市北区堂島 北九州市小倉北区柑屋町 名古屋市名古屋市中村区名駅	印刷 図書印刷 製本 大工製本	©駒田信二 一九八一 (検印省略)
--------	--	---------	--------------------------------------	----------	-----------	----------	-----------	---	--------------------	-------------------

私の小説教室 ■ 目

次

第一章 私の「教室」の人たち

小説を書く女性たち 9

芥川賞と小説教室と私 13

小説がナメラレルか 18

無礼な侵入者たち 21

小説教室受難記 23

対談・巣立つ新人作家 29

第二章 私の文章心得十章

心得(一) 力むな 63

心得(二) 気をゆるすな 66

心得(三) 常套語を使うな 71

心得(四) 句読点に氣を配れ 76

心得(五) 漢語は漢字で書け 83

心得(六) 漢字を使いすぎるな 89

心得(七) 辞書を引け 99

心得(八) 擬音や符号を乱用するな 110

心得(九) 言葉癖に氣をつけよ 115

心得(十) 氣取るな 118

第三章 私の文学論

日本語とは何だろう 125

散文と韻文 129

いかに書かないか 135

小説の読まれ方 139

「難死」した思想 142

私的「遁走」論 145

第四章 私の歩んできた道

私の読書遍歴 155

和洋中華御料理 167

菊さんの英和辞典 173

キーランドという作家 184

私の「あの頃の思い出」 186

駟も舌に及ばず 190

『夜明けの風』の作者と私 194

私のこの一冊の本——春と修羅

196

「脱出」の頃

200

私の一冊——水滸伝

203

まぶしい人

207

立原正秋と「四人組」

210

ツルゲーネフの散文詩

214

自作「遺書」の解説

216

あとがき

223

装幀 三代澤 信壽

第一章

私の「教室」の人たち

小説を書く女性たち

三年あまり前から私は、市民講座（朝日カルチャーセンター）のなかで小説教室を受持っている。実作指導の教室である。

受講生には二十歳代の人も、六十歳代、七十歳代の人もいるが、大半は三十歳代から五十歳代までの、いわゆる「奥さん」たちである。

「奥さん」は「奥さん」である限り、作文や随筆や手記などは書くことができて、小説は書けない。たとえば何野何子さんという人がいて、その人が「奥さん」であるということは、何野何子さんの「奥さん」であるにすぎないからである。つまり、自立した個人ではないからである。自立していない人に小説が書けるわけではない。小説を書くということ、お茶とかお花とか手芸とかを習うこととの根本的な違いがそこにある。お茶とかお花とか手芸とかは、上手にまねをすればそれでよく、従って教師は「はい、よくできました。だいぶん上達なさいましたね」といっておればよいのだが、小説はそうはいかない。お手本がないからである。あってはいけないからである。自分で

自分を掘りおこし、自分で自分のものを創り出していくよりほかないからである。

従って私は、なにも教えない。ただ、「奥さん」たちを「奥さん」としては扱わないだけである。「奥さん」たちの一人一人を、よその「奥さん」としてではなく、仲間として見るだけである。「奥さん」に対しては、叱ることも、からかうこともできないからである。叱ったり、からかったりするのとは、それぞれの「奥さん」たちが一人の「奥さん」という狭い世界のなかで片寄ったり固まったりしていてそれとは気づかずにいる思考を、ひろげるためである。「奥さん」を「奥さん」から解放することによって、それぞれの人がそれぞれの自分を掘りおこし、自分のものを創り出していくように仕向けるためである。

それを具体的にここに書くことは気恥ずかしい。さいわい、受講生の一人の重兼芳子さんの書いた文章があるので引かせてもらうことにする。

最初の講義の日、講師が、

「文学という、さも高尚な学問的なことをやろうと、皆さんは集まってきたのではないですか。それは違う。小説すなわち小なる説を書いてください。くだらないと思える生活の断片でも、もともと人間はくだらないものなのだから、切り捨ててしまわずにしっかりとみつめること」

と言った。少し勝手は違うが、むずかしい文学論ではないし、普通の言葉で話されるだけまだましだと思った。（注。以前文学セミナーなどで偉い先生方の難解な講義をきいたことがあるが、体に合わな

い立派すぎる服を着ているようで、しっくりいかなかった、という意味のことがこれより前に書かれているのである。この次までに宿題として、なんでもよいから書いてくるようにと言われた。前のゼミナールで宿題を出されたとき、はじめてにしてはうまいと誉められた。主婦の作文にしてはまあまあだろう。けなされることはまずないだろう。二十枚ほどの私の小説を読んだ講師は、

「教養という常識でくるんだ甘ったるい糖衣錠だ。上に被せられた常識の垢を削ぎ落としなさい」と、にこりともせずと言った。(中略) 今度こそと、鼻息も荒く、大きくなった子供たちが離れていく、さみしさを書いた。

「子供は育てば離れるのは当たり前です。こんなことをいくら書いてもつまらない。自分の経験とか、事実とかを、自分だけのものと思いこまないことです」

要するに、よいところは一つもないということだった。では私が一生のうちで最も悲しかったことを書こう。赤ん坊を亡くした話を書いた。書きながら思い出しては泣き、泣きながら書いた。

「悲しいことを書きこめば書きこむほど、読むものには悲しみが伝わってこない。感情を高ぶらせて書くと、作者の一人角力に終ってしまふ。こんなに力んで肩に力を入れて書いたものは、読む人に対する押しつけだ」

(中略) 私は思い切って、衣の下に隠れている醜い裸身をさらすことにした。自分を深くみつめてみれば、上等なものは一つもなく、愚かしさやくだらなさばかり見えてくる。諸悪のもとである教育ママや、痴漢や万引き、それになり得る下地は充分に持っている。私の恥多い部分を引き抜い

て、虚構の中の主人公に託すことにした。こんなに恥ずかしいことを書いたのだから、これでもう小説はやめようと思った。「水位」という作品であった。講師が読んで、

「いいものが書けたね」

と少しだけ口許をはころばせた。講座に入ってから二年経っていた。

これは「週刊朝日増刊」四月五日号（昭和五十四年）の「私がお台所で小説を書くようになったわけ」というエッセイの一部分である。

重兼さんに対しては、私はたぶん、もっとひどいことをいつてきたはずである。仲間だと思えばこそいえるのであって、「重兼夫人」に対してはいえることではない。

「石頭！」などと、たぶん「奥さん」に対しては「ご主人」もいわないであろうことをもいうこともある。しかし、その人も格別に腹をたてたりはしない。小説を書くという目的で教室にはいった何野何子さんであって、何野何男さんの「奥さん」ではないからである。

さまざまな何野何子さんがいる。さまざまな何野何子さんがいるということは、さまざまな個性があるということである。そのさまざまな個性を引き出すことが私の役目であって、その上に花を咲かせるのはその人の努力次第である。「私には才能がないのだろうか」という人がいる。「書きたいと思うことが、すでに才能でしょう。それを持続することのできる人が才能のある人です」と私は答える。書きたいと思って教室にはいつてくる人は、本人が意識しているかいないかは別として、

心になにかのかげりを持っている人であろう。私はそれを見つけようとする。具体的にはわかるはずはないが、仲間としてつきあっているうちに、なんとなくわかってくるのである。従って、ある点では私は、何野何子さんの心の傷を何野何男さんよりも知っていることもあるかもしれない。

傷をさらけ出した人は、ひらきなあって、あかるくなる。自分を深く見つめることができる、他者に対する狭い見方や、片寄った考え方もなくなってくる。小説を書くことによって「ご主人」に多少の迷惑をかけている何野何子さんは、しかし、書かない前よりも、物を見る眼がひろくなっている点において、人に対する心がひろくなっている点において、「奥さん」としても人間的によりよい「奥さん」になっているはずだと私は思うのである。

芥川賞と小説教室と私

朝日カルチャーセンターの、私が受持っている小説教室（小説の作法と鑑賞」という名の講座）から芥川賞作家が出たというので、ちょっととした騒ぎが私の身边にも及んできた。勿論、騒ぎは受賞者である重兼芳子さんの上にふりかかってきたものであって、私の身边に及んできたのはその小さな余波にすぎなかったが、それでも、二、三日の間は電話の応対にいそがしく、すっかり仕事のべー

スをくずされてしまった。

重兼さんの受賞という事件（といってよからうが、私にとってうれしい事件であることはいうまでもない。ずいぶんひどい目にあわせたり、いじめたりしてきたのに、めげずによくここまで歩いてきてくれたものだ、という感謝の思いもあったし、同時にまた、彼女をここまで支えてきたのは勿論彼女自身であり、その周辺の人たちであるけれども、小説教室でずっと彼女の作品を見てきたという点では、自分もまたその一人であるという点で、ささやかな満足を感じました。だから、彼女のことについての、あるいは小説教室のことについての質問に答えることは、度重なるとうるさいなあと思うこともなくなかったけれども、いやなことではなかった。

しかし、質問に答えているうちに、次のような声がきこえてくることもあった。「つまり、ホストクラブのホストのようなものですな」。小説教室における私の存在を、さらに朝日カルチャーセンターにおける講師たちの存在を、そういうものだと思いつけたいらしいのである。意表を突かれて私は返事に窮したが、そういわれてみれば、確かに、そういうところもないわけではなからう。だが、なにも小説教室に限ったことではなく、朝日カルチャーセンターに限ったことでもない。人々の集まりのなかでの人づきあいには、そういう心づかいも必要なことはむしろ当然ではなからうか。こんな見方をする単眼ヤロウは、オレの教室にはいないな、と私は思った。

また、次のような声もきこえてきた。「金と時間をもてあましている主婦でしょう。重兼さんのような主婦作家は、主婦は……、主婦が……」